I was 💥

梗概

プロ野球選手の北沢（30）は試合中にファールチップで股間を強打し、手術を受ける。

手術後、北沢が股間のコンディションを確認するためにHな動画を見ていると手術医の武田（50）から電話がくる。

「金玉袋の中に特殊な爆弾を仕掛けた。その爆弾は勃起にとともに起動し、ペニスのサイズが10センチ以下になると爆発する」

勃起中だった北沢は金玉を人質に取られた格好となり、勃起状態を維持しつつ武田から要求された1億をかき集めるために奔走する。

北沢は同僚のカズ（40）に助けを求め、1億を調達するも、金を受け渡す際、カズが武田を捕まえようとしたために受け渡しは失敗に

終わる。

武田との交渉が決裂したことで追いつめられた北沢の前に恋人ののぞみ（28）が現れる。

事情を知ったのぞみは「あなたの赤ちゃんがほしかった」と涙まじりに心の内を明かす。それを聞いた武田にある考えが浮かび、最後の力を振り絞って精子バンクがある研究所へと向かう。

武田は自分の存在と引き替えに精子を残す決意をする。死の恐怖に駆られつつ自慰をする中で、子を残すとは、先祖から繋がる「俺」という存在を次の「俺」に繋げることだと悟り、絶頂の中で果てる。

しかし、武田の死後、のぞみはカズと結ばれ、武田が命がけで残した「俺」が生を受けることは未来永劫なかった。

《登場人物》

北沢鉄二（30）　野球選手

カズ（40）（55）　野球選手

のぞみ（28）　北沢の恋人

武田（50）　医者

俊介（14）　のぞみの息子

○二軍球場・グラウンド

ガラガラのスタンド席。

北沢鉄二（30）、打席に立っている。

ピッチャー、投げる。

北沢、バットを振る。

球がバットをかすめる。

ファールチップが北沢の股間を直撃する。

北沢、股間を抑えて倒れ込む。

北沢、目の前が真っ暗になる。

○病院・病室

北沢、ベッドで目を覚ます。

北沢の視界に、心配そうにのぞき込むのぞみ（28）の顔。

のぞみ「鉄二！」

×　×　×

北沢、白衣を着た武田（50）の話を聞いている。

武田「陰嚢に裂傷があったので 50 針縫いました。精密検査では異常は見られません。今日中に退院して構いません」

北沢「…ありがとうございます（と頭を下げる）」

武田、病室を去る。

そばに立っていたのぞみ、

のぞみ「（武田へ）じゃ、私、まだ仕事あるから」

北沢「わざわざきてくれてありがとな」

のぞみ「心配したんだから」

北沢「ごめん」

のぞみ「またあとで」

のぞみ、北沢の頬にキスする。

○北沢のマンション・外観（夕）

○同・北沢の部屋

北沢、ソファーに座ってグローブを磨いている。

北沢、グローブをテーブルにおく。
北沢、落ち着かず、股間を見下ろす。
北沢、股間をまさぐる。
北沢「（ぼそり）バットも磨いてみるか」
北沢、スマホをとる。
北沢、スマホをいじる。
画面の検索欄に「TOKYOMOTION」と打ち込まれる。

×　×　×

室内に女の喘ぎ声が響きわたる。
北沢、スマホ画面を見つめながら、
北沢「（恍惚の表情で）オーイエス。ウォーーーイエス」
北沢の股間、もっこりと膨らんでいる。
北沢、股間を見下ろす。
北沢「問題ないようだな」
と、スマホの着信音が鳴る。
画面には、非通知、の表示。

北沢「…？（出る）」

武田の声「（冷たい声で）北沢鉄二だな。よく聞け。お前の金玉袋に特殊な爆弾を仕掛けた」

北沢「…？」

武田の声「その爆弾は勃起とともに起動し、ペニスのサイズが 10 センチ以下になると爆発する仕掛けだ」

北沢「…そうか。よくわからんが取り込み中だ。イタズラ電話なら切るぞ」

武田の声「私の声に聞き覚えはないか？」

北沢「声？」

武田の声「思い出せ」

○病院・病室（回想）

白衣を着た武田、

武田「（北沢へ）陰嚢を 50 針縫いました」

○（戻って）北沢の部屋

北沢「手術の先生？！」

武田の声「ご名答。手術中にお前に爆弾を仕

掛けた」

北沢「待ってください！　さっきから爆弾がどうのこうのって何の冗談です？」

武田の声「冗談ではない。今証拠を見せる。テレビをつけろ」

北沢、渋々テレビをつける。

武田の声「チャンネルを1にあわせろ」

北沢、1チャンネルに変える。

テレビ画面に歌番組の映像が映し出される。

武田の声「歌番組の生中継だ。白のスーツを着た男を見ろ。ターゲットの男だ」

白スーツを着た男、ステージ上で出演者と共ににこやかな笑みを浮かべている。

武田の声「男の金玉袋にお前と同じ爆弾、つまり、勃起とともに起動し、ペニスのサイズが10センチ以下になると爆発する特殊な爆弾を仕掛けられている」

北沢「…」

武田の声「この男は女を散々弄び、何人もの

女を自殺に追いやった。死んでも仕方のない人間だ」

男、ドレスで着飾った司会者の尻をみる。

男、鼻の下が伸びる。

武田の声「爆弾が起動したようだ」

男、司会者にマイクを向けられる。

男、神妙な顔つきになり、受け答えをする。

武田の声「そろそろか」

受け答えをしていた男、突然、爆発する。

北沢「？！」

スタジオ内がパニックになる。

スタッフ１の声「金玉袋が爆発したぞ！」

スタッフ２の声「中継をとめろ！」

テレビ画面、砂嵐になる。

武田の声「これでわかったろう」

北沢、はっとして股間を見下ろす。

股間が縮みかけている。

北沢、とっさに乳首をいじり出す。

北沢「…何が目的だ？」

武田の声「1億だ。1億払えば爆弾の解除方法を教える」
北沢「1億だと？！」
武田の声「警察にはいうなよ。もっとも、いったところで信じてもらえんだろうが」
北沢「い、1億なんて金あるわけない！」
武田の声「プロ野球選手は儲かると聞く」
北沢「俺は二軍だ！　そんな金はない！」
武田の声「私の知ったことではない。とにかく1億を用意しろ。30分後、金の受け渡し場所を教える」
電話、切れる。
北沢「おい！」
北沢、慌ててHな動画を再生する。
スマホ画面から女の喘ぎ声が響く。
北沢「（乳首をいじくりながら）1億だと？」

×　×　×

北沢、ズボンの中に両手を突っ込んで股

間をしごいている。

北沢「（ぎゅっと目を閉じて）１億…１億…」

○イメージ映像

画面下に「♂」マーク。

♂マークの隣に満タン状態のゲージが表示されている。

北沢の声「１億…１億…」

画面に一万円札が現れる。

一万円札に描かれた福沢諭吉が喋り出し、

諭吉「金の工面に困っているのか」

北沢の声「あ、はい」

諭吉「金銭は独立の基本なり。私も一緒に策を練ってやろう」

北沢の声「あ、ありがとうございます」

みるみる♂ゲージが減っていく。

北沢の声「い、いかん！　おっぱいだ…おっぱい…」

福沢諭吉を押しのけ、おっぱいプリンが現れる。

おっぱいプリン、ぷるぷるに揺れる。
♂ゲージが上昇していく。
北沢の声「いや、金だ…金を何とかせねば…」
おっぱいプリンを押しのけ、福沢諭吉、現れる。
♂ゲージ、みるみる下がっていく。

○（戻って）北沢の部屋
北沢「（目を開け）だ、だめだ！　金とエロいことを同時に考えることなんかできない！」
北沢、目を閉じる。
北沢「なんとかしろ…なんとか金とエロを両立させねば！」

○イメージ映像
画面下に♂ゲージ。
画面真ん中に一万円札の中の福沢諭吉。
♂ゲージ、下がっていく。
諭吉を押しのけ、5千円札の樋口一葉が現れる。

樋口、思わせぶりに着物の襟をめくる。
樋口の胸元が露わになる。
♂ゲージ、ぐーんと上がっていく。

○（戻って）北沢の部屋
北沢「（目を閉じたまま）ようし！」
とガッツポーズ。
北沢「（頷きながら）ようし…ようし…」
北沢、目を開ける。
北沢、急いでスマホで電話をする。
カズ（40）、出る。
カズの声「おう。鉄二か。聞いたぞ。試合中に股間を…」
北沢「カズさん！　頼みがあります！　今すぐ1億必要なんです！」
カズの声「（即答）いいだろう」
北沢「30分以内にキャッシュでお願いします！」
カズの声「いいだろう」

×　×　×

テーブルの上に札束の入ったボストンバッグ。

北沢、ズボンに手を入れて股間をしごきながら電話をしている。

武田の声「…金の受け渡し場所は立川公園のベンチだ。遅れるなよ」

電話、切れる。

様子を見ていたカズ、

カズ「（神妙な顔で）事情はわかった。だが、この金はお前のために持ってきたのであって犯人にくれてやるわけではない」

北沢「…」

カズ「お前の代わりに俺が受け渡し場所にいって犯人をとっ捕まえてやる」

北沢「…そんな無茶ですよ」

ガス「大丈夫だ。お前は爆弾が破裂しないようにそこでシコってればいい」

北沢「（呻く）もう限界です！」

カズ「諦めるな。お前にはかわいい彼女がいるだろ？」
北沢「…」
カズ「できるか？」
北沢「…はい」
カズ「よし。いってくる」
カズ、ボストンバッグを手にする。

×　×　×

北沢、ズボンの下に手を突っ込んで股間をしごいている。
北沢「のぞみ！　のぞみ！　イクっ！」
と、スマホが鳴る。
北沢「（出る）もしもし！」
武田の声「交渉不成立だ」
電話、切れる。
北沢、呆然とする。
カズ、ボストンバッグを持って入ってくる。

北沢「カズさん！」
カズ「すまん。失敗した」
武田「どういうことですか？！」
カズ「いや、受け渡し場所にいったはいいが、金を取りにきた奴をとっ捕まえてみたら、ソイツは囮で、犯人は遠くから俺をみていたらしく、まんまと逃げられた」
北沢「フツーそれくらいのこと簡単に予想できるでしょう！」
カズ「無茶だ。俺は野球しかしてこなかったんだ」
北沢「…」
　北沢のスマホ、鳴る。
北沢「（出る）」
武田の声「舐めた真似をしてくれたな」
北沢「ご、誤解だ！　俺は…」
武田の声「もう一度だけチャンスをやろうといいたいところだが緊急のオペが入った」
北沢「ふざけるな！　さっさと爆弾を解除しろ！　おい！」

声「先生。手術のお時間です」
武田の声「そういうことだ」
北沢「待て！」
武田の声「終わりだな」
電話、切れる。
北沢、うなだれる。
北沢、股間をしごく手がとまる。
カズ「すまん。俺はナイター戦があるから」
カズ、そそくさと去る。

× × ×

北沢、壁にもたれかかり、弱々しく乳首をいじくっている。
ドアのノック音。
のぞみの声「鉄二？！」
北沢「…？」
のぞみの声「さっきカズさんと会って事情は聞いた！　鉄二！　開けて！　いるんでしょ！」

北沢「…」
のぞみの声「開けてくれないなら無理やりあ開けるから！」
　ドアノブを激しく回す音。
北沢「（叫ぶ）のぞみ！　くるな！　爆発するぞ！」
　ドアノブの音がやむ。
のぞみの声「…なんで？！　どうしてこんなことに」
北沢「知るか！」
　北沢、ふいに涙ぐむ。
北沢「のぞみ、ごめんな…」
のぞみ「鉄二？」
北沢「俺、一軍にあがって活躍してさ、お立ち台でのぞみにプロポーズしようとずっと考えてた…」
のぞみの声「え？」
北沢「だが、それもできそうにない」
　北沢、乳首をいじる力が弱くなる。
のぞみの声「…今して」

北沢「え？」
のぞみの声「プロポーズの言葉、聞かせて」
北沢「…」
北沢、おもむろに立ち上がる。
北沢、玄関のドアの前に立つ。
北沢「（股間をしごきながら）のぞみ。愛してる。俺と結婚してください」
のぞみの声「はい」
北沢「（微笑む）」
のぞみの声「…ねえ」
北沢「ん」
のぞみの声「もし赤ちゃんができたら、どんな子だろうね」
北沢「赤ちゃん？」
のぞみの声「男の子なら、鉄二みたいに野球選手になるのかな？」
北沢「（ふと考え込む）」
のぞみの声「…鉄二？」
北沢「そうだ…赤ちゃんなら…」
のぞみ「鉄二、どうしたの？」

北沢「のぞみ！　今すぐタクシーを呼んでくれ！」

○研究所・廊下

北沢とのぞみ、白衣の女に案内されて歩いている。

○同・研究室

北沢、のぞみ、入ってくる。

のぞみ、困惑して見渡す。

のぞみ「ここは？」

北沢「精子バンクのある研究所だ。ここの所長がうちの球団のスポンサーをやってる関係で懇意にさせてもらってる」

のぞみ「精子バンク？」

白衣の女、ジュラルミン製の試験管を北沢へ渡す。

白衣の女「精子はこの中へ入れてください。爆発の衝撃にも耐えられます」

北沢「（受け取る）」

のぞみ、北沢を見つめる。
北沢「（頷く）そういうことだ」
のぞみ「鉄二…」
北沢「お別れだ。のぞみ。愛してる！」
のぞみ「わたしも！」
北沢「例え肉体が離れても俺たち永遠に一緒だ！　誰にもお前を渡さない！」
のぞみ、涙ぐむ。
北沢「結婚指輪の一つも渡せなかったけど…俺はお前のために…俺たちの赤ん坊を…」
白衣の女「そろそろ退避を」
白衣の女、のぞみを連れ出そうとする。
のぞみ「鉄二！」
北沢「のぞみ！」
のぞみ、白衣の女と共に部屋の外へと出ていく。
北沢、深呼吸する。
北沢、目をつぶり、股間をしごき出す。
北沢、息が荒くなる。

○（回想）病院

武田、電話をしている。

武田「北沢。終わりだな」

○（戻って）研究室

北沢、目を閉じている。

北沢「終わらない…俺は死ぬが、俺の子供が必ずお前に復讐する…そう。俺の子は俺の分身。俺そのもの…」

北沢の息づかいが室内に響く。

北沢「大丈夫…死は怖くない…のぞみと俺は…俺は…次の俺を繋げるために生まれてきた。俺は死なない！　俺は大丈夫！」

北沢、さらに息が荒くなる。

北沢「のぞみ…俺…俺…俺！　俺イクっ！俺！　イクよ俺！　俺！　俺イクよ！　俺！俺！　俺！　俺よーーーーーー！！！！」

北沢、吐息が漏れる。

北沢、恍惚に満ちた表情。

○暗転画面

タイトルの一部「I was」が表示される。

続いて、ボーンという爆発音。

以下エンドロール

エンディング曲の代わりに吉野弘の「I was born」の詩が朗読される。

ワイプが表示され、詩に合わせた映像が流れてゆく。

○中学の教室（15年後）

少年の声「確か、英語を習い始めて間もない頃だ」

国語の授業中。

俊介（14）、教科書を広げ、詩を読み上げている。

俊介の声「或る夏の宵。父と一緒に寺の境内を歩いてゆくと青い夕靄の奥から浮き出るように白い女がこちらへやってくる。物憂げに

ゆっくりと」

○境内

俊介、カズ（55）と歩いている。

正面から妊婦がやってくる。

俊介の声「女は身重らしかった。父に気兼ねをしながらも僕は女の腹から眼を離さなかった。頭を下にした胎児の柔軟なうごめきを腹のあたりに連想しそれがやがて世に生まれ出ることの不思議に打たれていた」

俊介、妊婦の腹をじっと見つめている。

○中学の教室

俊介、教科書を読んでいる。

俊介の声「女はゆき過ぎた。少年の思いは飛躍しやすい。 その時、僕は<生まれる>ということが、まさしく<受身>である訳をふと諒解した。僕は興奮して父に話しかけた」

○境内

俊介とカズ、歩いている。

遠くに妊婦の後ろ姿。

俊介の声「―やっぱりＩ was born なんだね―父は怪訝そうに僕の顔をのぞきこんだ。僕は繰り返した。―Ｉ was born さ。受身形だよ。正しく言うと人間は生まれさせられるんだ。自分の意志ではないんだね―」

カズ、突然、立ち止まる。

俊介の声「その時、どんな驚きで、父は息子の言葉を聞いたか。僕の表情が単に無邪気として父の顔にうつり得たか。それを察するには、僕はまだ余りに幼なかった。僕にとってこの事は文法上の単純な発見に過ぎなかったのだから」

○夜道

俊介とカズ、歩いている。

俊介の声「父は無言で暫く歩いた後　思いがけない話をした。―蜉蝣という虫はね。生まれてから二、三日で死ぬんだそうだが、それ

なら一体、何の為に世の中へ出てくるのかと、そんな事がひどく気になった頃があってね―」

俊介、カズを見上げる。

俊介の声「僕は父を見た。父は続けた」

○北沢の部屋

カズ、仏壇の前に座り、北沢の遺影を見つめている。

俊介の声「―友人にその話をしたら、或日、これが蜉蝣の雌だといって拡大鏡で見せてくれた。

カズ、仏壇に置かれた顕微鏡を覗き込む。

俊介の声「説明によると口は全く退化して食物を摂るに適しない。胃の腑を開いても入っているのは空気ばかり。見るとその通りなんだ。ところが、卵だけは腹の中にぎっしり充満していて、ほっそりした胸の方にまで及んでいる。それはまるで目まぐるしく繰り返される生き死にの悲しみが、咽喉もとまでこみあげているように見えるのだ。淋しい光りの

粒々だったね」

カズ、北沢の遺影を見る。

俊介の声「私が友人の方を振り向いて<卵>というと彼も肯いて答えた。<せつなげだね>」

○夜道

カズ、星空を見上げる。

俊介の声「そんなことがあってから間もなくのことだったんだよ。お母さんがお前を生み落としてすぐに死なれたのは―」

○カズの家・リビング

仏壇が置かれている。

仏壇にのぞみの遺影。

○河原（回想）

のぞみ、手にしたジュラルミン製の試験管を寂しげに見つめている。

隣にいたカズ、のぞみを抱きしめる。

のぞみ、カズを受け入れる。

握られた試験管がぽとりと落ちる。

○（戻って）カズの家・洗面所

俊介、鏡の前に立っている。

俊介の声「父の話のそれからあとは、もう覚えていない。ただひとつ痛みのように切なく、僕の脳裡に灼きついたものがあった」

俊介、自分の肉体を見つめる。

俊介の声「―ほっそりした母の、胸の方まで、息苦しくふさいでいた白い僕の肉体―」

（おわり）